

「ふむ」は用いられまい。もしそのような状況を表すとすれば、「おす」か「おさえる」が用いられるであろう。

(29) 箱を 足の甲で おす。

(30) *箱を 足の甲で ふむ。

(31) 足の横で ドアを おさえる。

(32) *足の横で ドアを ふむ。

また、足の裏を用いたとしても水平方向に力が加わるならば、「ふむ」は用いられない。

(33) *寝ころんで 箱を ふんだ。

〈力を加える〉という特徴に、体重をかけることをも含めた点とも関連するが、「ふむ」場合、力が加わるのは鉛直方向に限られる。そして、この点は、上の例から、手段による制限とも言い難い。したがって、〈垂直方向に〉という特徴も、「ふむ」の意義特徴の一つとしてあげておく。

以上より、「ふむ」の意義は次のようになる。

「ふむ」：〈(動作主が) (動作主の) 足で(対象物に) 鉛直方向に力を加える。〉

3. 2.

「ふむ」には、3.1.で述べた以外にもいくつかの用法がある。

(34) アメリカの土を ふむ。

この例は、実際に「土を ふむ」動作からの表現といえよう。しかし、

(35) 初舞台を ふむ。

(36) 正規の手つづきを踏んでビザをもらうには3か月かかります。(『外国人のための基本語用例辞典第二版』の用例より)

などの例は、3.1.で述べた「ふむ」の意義と関連する

ものと想像できるが、別の意義を考える方が妥当かもしれない。

さらに、次の「ふむ」にも別の意義を考えるべきであろう。

(37) このダイヤモンドのゆびわは安く踏んでも100万円はします。(『外国人のための基本語用例辞典第二版』の用例より)

また、次のような、イディオムと解されるものもある。

(38) 二の足を ふむ。

(39) じだんだを ふむ。

(40) 韻を ふむ。

これらの「ふむ」については、ここでは述べない。

4. まとめ

以上みてきたように、「ける」は「たたく」などの打撃動詞と、「ふむ」は「おす」や「おさえる」「つく」などの動詞と共通する点が多い。したがって、これらの語を分類していく際には、「足の動作」という、いわば手段を基にしたグルーピングとともに、動作の特徴によるグルーピングが必要である。そして、語彙の体系あるいは構造を考える場合(動詞の場合)には、むしろ、後者のグルーピングが優先されるべきではなからうか。この語に限らず、このような観点から、「足の動作」あるいは「口の動作」などと一まとまりにされている語の再分類を行なう必要があろう。

言語経歴：1955年3月 兵庫県西脇市生0歳～18歳 西脇市 18歳～22歳 静岡市 22歳～ 東京都大田区 (東京都立大学大学院学生)

さける・よける

杉本 武

1. はじめに

本稿で取り上げる「さける」と「よける」は、国立国語研究所1964では、「2.353競走・攻防・勝敗」に分類されている。この二語は、漢字とかなで表記する場合、いずれも「避ける」になる。そして、

(1) 自動車を 避ける。

のような文では、「さける」と読むべきか、「よける」と読むべきかは、これだけからは判断しがたい。とこ

ろが、

(2) 人目を 避ける。

では、「さける」としか読めない。また、(1)を「さける」と読んだ場合と、「よける」と読んだ場合とでは、意味は等価ではない。

そこで本稿では、このような、両語の意味の違いを明らかにしていきたい。

2. 分析

2.1. 統語分析

「さける」と「よける」はともに次のような構文で用いられる。

(3) NP₁ガ NP₂ヲ _____

ここではまず、カ格名詞句 (NP₁)、ヲ格名詞句 (NP₂) に対する制限をみてみたい。

まずカ格には、「さける」と「よける」のいずれでも、[+human] という素性を持つ名詞句がたち得る。^(注2)

- (4) 太郎が 次郎を さける。
- (5) 通行人が 酔払いを さける。
- (6) 花子が 水溜りを よける。
- (7) バッターが ボールを よける。

つぎに、[+animate, -human] という素性を持つ名詞句の場合はどうであろうか。

- (8) ?犬が 飼主を さける。
 - (9) ?ネズミが 猫を さける。
- (8)(9)は、普通の表現というよりも、擬人的な表現と考えた方がよいだろう。一方、「よける」の場合には、
- (10) 猫が 水溜りを よける。
 - (11) 小鳥が 木を よける。

のように自然な文である。この他に、「さける」も「よける」もカ格には、乗物などの人間の操作する機械を示す名詞句も立ち得る。

- (12) 船が 暗礁を さける。
- (13) 船が 暗礁を よける。

しかし、これは、[-animate] という素性を持つ名詞句でも、場合によってカ格にたつことがあると考えるよりも、本来 [+human] という素性を持つ名詞句のたつ位置には、^(注3)このような名詞句もたち得ると考える方がよいであろう。

以上から、カ格名詞句に対する制限は次のように示される。

(14) さける / NP₁ガ NP₂ヲ _____
 [+human]
 よける / NP₁ガ NP₂ヲ _____
 [+animate]

つぎに、ヲ格名詞句に対する制限である。まず「さける」についてみる。

- (15) 警官を さける。
- (16) 犬を さける。
- (17) 暗礁を さける。
- (18) 人目を さける。

このように、「さける」の場合には、[+human], [+animate, -human], [-animate], [+abstract] のいずれの素性を持つ名詞句でもヲ格にたち

得る。したがって、(注1)で示した素性に関しては、選択制限がないことになる。一方「よける」の場合には、

- (19) 警官を よける。
- (20) 犬を よける。
- (21) 暗礁を よける。
- (22) *人目を よける。

のように、[+abstract] という素性を持つ名詞句はヲ格にたない。

このようなヲ格名詞句に対する制限を(14)とまとめて示すと次のようになる。

(23) さける / NP₁ガ NP₂ヲ _____
 [+human] [±abstract]
 よける / NP₁ガ NP₂ヲ _____
 [+animate] [-abstract]

ところが「さける」の場合には、^(注4)柴田編1976で述べられているように、ヲ格に補文をとることができる。

- (24) 太郎が 次郎に会うのを さける。
- (25) 人々が その家に近づくのを さける。

一方、(24)(25)の文を「よける」で言い換えることはできない。^(注5)

- (26) *太郎が 次郎に会うのを よける。
- (27) *人々が その家に近づくのを よける。

このことから、柴田編1976は、「動詞で表わされる事柄を対象とする文脈では、サケルは使えてもヨケルは使えない (p. 50)」としている。しかし、

- (28) 太郎が 自動車が突込んでくるのを よける。
- (29) ハイカーが 石が落ちてくるのを よける。

の場合、筆者の内省では可能な文である。ところが、これを「さける」で言い換えることはできないようだ。

- (30) ?? 太郎が 自動車が突込んでくるのを さける。
- (31) ?? ハイカーが 石が落ちてくるのを さける。

以上のことから、まず「さける」について考えてみたい。(24)(25)、(30)(31)からまずわかることは、主文の主語と補文の主語とが同一名詞句でなければならないということである。例えば、(24)の基底には、

(32) [s 太郎ガ [NP [s 太郎ガ 次郎ニ 会う] ノ] ヲ サケル]

のような構造があり、(24)は、主文の主語と同一名詞句である補文の主語「太郎」が消去されて派生される。

一方、非文である(30)の基底には、

(33) [s 太郎ガ [NP [s 自動車ガ 突込デケル] ノ] ヲ サケル]

のような構造があると考えられ、主文の主語「太郎」と補文の主語「自動車」とは同一名詞句ではない。(30)(31)のような例文をさらに挙げておく。

- (34) *太郎が 次郎が自分 (=太郎) に話しかけるの

をさける。

(35) *先生が 学生が留年するのを さける。

このうち(34)は、次の例文と好対照を示している。

(36) 太郎が 次郎に話しかけられるのを さける。

このように、「さける」の場合、ヲ格にたつ補文には、その主語が主文の主語と同一名詞句でなければならないという制限がある。つぎに、「よける」について考える前に、「さける」の場合のヲ格にたつ補文に対するもう一つの制限をみてみたい。

(37) *生徒が 英語を話せるのを さける。

(38) *社長が お金が要るのを さける。

(39) *太郎が 花子が好きなのを さける。

上の例文からわかるように、ヲ格にたつ補文の述語(ここでは「話せる」「要る」「好きだ」)が[+stative]という素性を持つ場合は非文である。したがって、「さける」の場合のヲ格にたつ補文には、その述語が[-stative]という素性を持つもの(つまり動詞の一部)でなければならないという制限があることになる。

今度は「よける」について考えてみたいが、これには問題がある。徳川・宮島1972も柴田編1976も、「～するのをよける」という文はないとしている。しかし、(28)も(29)も自然な文であろう。とはいえ、「よける」にも「さける」と同様、「～するのをよける」という用法があるとするのは問題である。というのも、(28)(29)には、それぞれ、

(40) 太郎が 突込んでくる自動車を よける。

(41) ハイカーが 落ちてくる石を よける。

というような、ヲ格名詞句を連体修飾構造とした「読み込み」があるからである。すなわち、(28)(29)のような文のヲ格にたつ補文を、〈コト〉としてではなく〈モノ〉として読み込んでいるのである。これと並行するように、(28)(29)の「ノ」を「コト」に替えた次の文は非文である。

(42) *太郎が 自動車が突込んでくることを よける。

(43) *ハイカーが 石が落ちてくることを よける。

これに対して、(24)(25)の「さける」の場合には、「ノ」を「コト」に替えることができる。

(44) 太郎が 次郎に会うことを さける。

(45) 人々が その家に近づくことを さける。

これらのことから、(28)(29)のような用法は周辺の用法として、「よける」はヲ格に補文をとらないとするのが妥当であると思われる。

2.2. 意味分析

2.2.1. 多義性について

「さける」も「よける」もともに、ヲ格に[-abstract]という素性を持つ名詞句をとり得る。

(46) 太郎が 自動車を さける。

(47) 太郎が 自動車を よける。

(46)と(47)はともに、「太郎が自動車と接触しないように移動する」ことを表わし得る。しかし、(47)にはこのような解釈しかないが、(46)にはこの他の解釈もあり得る。例えば、「太郎が(道路が混雑しているので)自動車に乗らないようにする」、「太郎が(酔払っているので)自動車を運転しないようにする」という解釈もできる。このように、(46)は多義的であると言えそうだ。同様に、

(48) 太郎が 次郎を さける。

(49) 太郎が 次郎を よける。

のうち、(49)は、(47)と同様に、「太郎が次郎と接触しないように移動する」ことしか表わさないが、(48)はこれとともに、「太郎が次郎と会わないようにする」ことも表わし得る。

つぎに、ヲ格に[+abstract]という素性を持つ名詞句をとった場合をみてみたい。2.1.でも述べたように、「よける」の場合は、ヲ格に[+abstract]という素性を持つ名詞句をとることはできない。

(50) 学生が いざこごを さける。

(51) *学生が いざこごを よける。

ところが、(50)は、(46)(47)と同様に多義的である。(50)は、「学生がいざこごにまき込まれないようにする」とも、「学生がいざこごを起こさないようにする」とも解釈できる。なおこの場合、対象は抽象物であるので、「学生がいざこご<注6>と接触しないように移動する<注7>」という解釈は不可能である。

このように、「さける」を含む文は多義的であるが、次のように一義的な場合もある。

(52) 船が 暗礁を さける。

(53) 犯罪者が 人目を さける。

これについては後で述べたい。

さてつぎに、上のような多義性をいかに説明するかが問題になってくるが、その前に、これまではヲ格名詞句が[_{NP}S Comp]でない場合であったが、今度はヲ格名詞句が[_{NP}S Comp]の場合をみてみたい。

ヲ格に[_{NP}S Comp]をとるのは、2.1.でみたように、「さける」だけである。

(54) 太郎が 外出するのを さける。

(55) 大臣が 質問に答えるのを さける。

54も55も、主体が補文によって表わされる事態が起こらないようにすることを表わして、一義的である。言い換えると、この場合、「さける」行為の対象はある事態である。

ここで、先の多義性について振り返ってみたい。例えば50の多義性は、ヲ格名詞句に動詞を補って、[NP S Comp]の形にすることによって示される。

56 学生が いざこざにまき込まれるのを さける。

57 学生が いざこざを起こすのを さける。

このことから、「さける」行為の対象は、ヲ格名詞句が[NP S Comp]という形をとらない場合でも、ヲ格名詞句を含む文によって表わされる事態であると言える。したがって、ヲ格名詞句が[NP S Comp]であってもなくても、意味的な構造は同じであることになる。ただ異なるのは、ヲ格名詞句が[NP S Comp]でない場合、補文の動詞が外形的には示されず、意味解釈において、コンテキストやヲ格名詞句についての情報から補われることである。これは「さける」の全ての場合に言える。

58 太郎が 自動車を さける。

59 太郎が 自動車とぶつかるのを さける。

60 太郎が 自動車に乗るのを さける。

61 太郎が 自動車を運転するのを さける。

62 太郎が 次郎を さける。

63 太郎が 次郎にぶつかるのを さける。

64 太郎が 次郎と会うのを さける。

また、先にふれたように一義的な場合は、ある一つの動詞でしか補い得ない場合である。

65 船が 暗礁を さける。

66 船が 暗礁にぶつかるのを さける。

67 犯罪者が 人目を さける。

68 犯罪者が 人目にふれるのを さける。

ここで、「さける」と「よける」の大まかな意義差を示しておく。

69 サケル/NP₁ガ NP₂ヲ _____
<NP₁がEという事態が起こらないようにする>

70 ヨケル/NP₁ガ NP₂ヲ _____
<NP₁がNP₂と接触しないように移動する>
このうち、「さける」の「事態E」の含む内容については次項で考察したい。

2.2.2. 事態Eについて

本項では、「さける」の場合の事態Eの内容について考察する。

まずヲ格に補文をとる場合は、その補文が事態Eを表わす。そして、この補文には、2.1.で述べたように、主文の主語と補文の主語とが同一名詞句でなければならないという制限があった。

では、ヲ格に補文をとらない場合、事態Eはどのような内容を含むのであろうか。これは、前項でみたように、ヲ格名詞句を含む文で表わされる事態である。例えば、

71 太郎が 花子を さける。

の場合、事態Eは「太郎が花子と会うこと」などである。ここで、この事態Eを表わす文の主語も「さける」の主語と同一名詞句でなければならないという制限があるようだ。したがって、

72 通行人が 雨を さける。

の場合の事態Eも、「雨が降ること」ではなく、「通行人が雨にあたること」である。同様にして、

73 花子が 甘いものを さける。

では、「花子が甘いものを食べること」である。また、

74 大臣が 明言を さける。

の場合の「大臣が明言すること」のように、ヲ格名詞句が漢語サ変動詞の語幹になることもある。

以上のように、ヲ格に補文をとらない場合、事態Eを表わす文の主語には「さける」の主語の同一名詞句がたち、ヲ格名詞句は主語以外の位置にたつ。これをまとめると次のようになる。

75 NP₂ = [NP S Comp] のとき
事態E ← S^(注9)

NP₂ ≠ [NP S Comp] のとき
事態E ← NP₁がNP₂ (が) Pred

(ただし 'Pred' はコンテキスト等によって解釈される。また「が」は「が」以外の格助詞を示す)

ところで、柴田編1976は、「サケルはく抽象物あるいは具体物との何らかの関わりを持つこと」を回避することである (p. 50)」と記述している。つぎに、この記述と上の記述とを比べてみたい。

柴田編1976の上のような記述は、

76 水溜りを さける。

のような文が、

77 水溜りに落ちるのを さける。

のような内容を持つこと^(注10)からなされている。これは、本稿の2.2.1.の考察と同じである。そして、そこで述べた多義性は、柴田編1976の記述では、「関わり」という語のもつ曖昧性として処理されるのだろう。このようにみえてくると、この二つの記述は等価であるよう

にみえる。

ところで、ここで、柴田編1976の場合、「さける」のヲ格に補文をとる場合、「さける」は「く補文で表わされる事態」を回避すること」を表わすとされるだろう。ところが、このように記述すると、ヲ格に補文をとらない場合ととる場合との、回避される「事態」の意味構造の類似性を把えられない。柴田編1976によれば、(76)は「く水溜りと何らかの関わりを持つこと」を回避すること」であるのに対して、(77)は「く水溜りに落ちること」を回避すること」と異なった解釈を与えなければならないになってしまう。さらに言えば、「関わり」というのも、あまりに漠然としている。

この点を考えると、柴田編1976の記述よりも、本稿の(75)の記述の方が望ましいと思われる。

つぎに、柴田編1976で述べられている「前提」の問題にふれておきたい。柴田編1976は、「サケルにはさらに対象物との何らかの接触(関わり)を持つことがく好ましくない」という前提がある(p. 52)」と述べている。確かに、「さける」の場合、問題となる事態が好ましくないという解釈が付け加わる。例えば、

(78) 太郎が 次郎に金を貸すのを さける。

の場合、「次郎」は借りた金を返さないで、「次郎」に金を貸すのは「太郎」にとって好ましくない、あるいは、「次郎」は悪いことにそのお金を使うので、「次郎」に金を貸すのは一般的に好ましくないということが含意されている。しかし、これを前提として把えるのは問題がある。

ある発話がある前提を含む時、その前提が聞き手にも了解されていない限り、その発話は不自然なものになる。したがって、「誰かが来る」という前提を含む「来るのは太郎だ」という発話は、聞き手がその前提を了解していない場合、不自然な発話である。ところが、(78)の場合、聞き手が「太郎が次郎に金を貸すのは好ましくない」ということを了解していなくても自然な発話である。したがって、(78)の場合、「太郎が次郎に金を貸すのは好ましくない」ということは、(78)の前提ではなく、(78)に含まれる本来の「メッセージ」であると考えなければならない。

そこで、以上のことをふまえて、(69)の一部を次のように修正する。

(79) <NP₁がEという好ましくない事態が起こらないようにする>

3. まとめ

以上の分析を次にまとめる。

●さける / NP₁が NP₂ヲ _____
ただし、NP₂ = [NP S Comp] の場合、
S = [_S NP₁が X Pred]

Pred = [-stative]

<NP₁がEという好ましくない事態が起こらないようにする。ただし、

NP₂ = [NP S Comp] のとき
E ← S

NP₂ ≠ [NP S Comp] のとき
E ← NP₁が NP₂(が) Pred

(なお 'Pred' はコンテキスト等によって解釈される。また「が」は「が」以外の格助詞を示す)

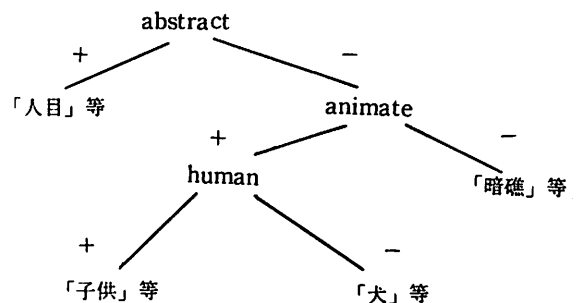
●よける / NP₁が NP₂ヲ _____
ただし、NP₁がNP₂と接触しないように移動する)

なお、「よける」がヲ格に補文をとらないことは、(注5)で述べたように、ヲ格名詞句が [-abstract] という素性を持たなければならないということから余剰的に導き出されるので、指定する必要はない。

4. おわりに

本稿では、「さける」と「よける」の意味を記述するための大枠を示すにとどまり、両語(特に「よける」)の細かな意味の記述をすることはできなかった。今後、本稿で示した大枠を細密化し、それによって両語の意味・用法の違いを説明できるようにする必要があるだろう。

(注1) ここで言う素性は統語素性を示し、次のような分類をたてる。



(注2) 名詞句の素性は、原則的には、その名詞句の head noun によって決定されるものとする。

(注3) ここで、ガ格にたつ名詞句は動作主の役割を果たしているが、そのような場合、本来 [+human] という素性を持つ名詞句がたつ位置に、「船」「自動車」のような人間が操作する機械を示す名詞

がたつことは一般的である。

(注4) ここで言う補文は、[NP S ノ/コト]のような補文標識をとるような埋め込み文のことを指し、[NP S N]のような連体修飾構造の埋め込み文のことは指さないことにする。なお、「ノ」「コト」を補文標識とすることには問題があるが、本稿では「ノ」「コト」を補文標識(Comp)として一括して示す。

(注5) ただし、徳川・宮島1972に、

「～のを」のかたちの目的語でも、「むこうからくるのを(大きいのを)さける(よける)のように「ものを」の意味のときは、両方使えるが、「ぶつかるのをさける」のように「ことを」の意味では「さける」だけが使われる。

(p. 407)

と指摘されているように、「よける」でもヲ格に「Sノ」をとることがあるが、この場合の「ノ」はCompではなく、名詞であると考え。また、[NP S Comp]は[+ abstract]という素性を持つが、「大きいの」のような[NP S N]は[- abstract]という素性を持つ。したがって、「さける」は、ヲ格に[+ abstract]という素性を持つ名詞句をとる

ことができるため、ヲ格に[NP S Comp]をとることができるが、「よける」は、ヲ格に[+ abstract]という素性を持つ名詞句をとることができないため、ヲ格に[NP S Comp]をとることができないと考えられる。

(注6) 「さける」あるいは「よける」行為を及ぼすものを「主体」、及ぼされるものを「対象」と呼ぶことにする。

(注7) 「抽象物」とは、[+ abstract]という素性を持つ名詞句の指示物(referent)を示す。

(注8) ただし、(50)を(50)(57)のような文から変形によって派生しようという意図はない。

(注9) '←'は、右辺によって左辺が表わされることを示す。

(注10) これは、本稿で言うように、ヲ格に補文をとらない場合でも、「さける」行為の対象がある事態であることを示していると思われる。

言語経歴：1958年11月 東京都豊島区生 3
歳～埼玉県朝霞市
(東京都立大学学生)

サケル・ヨケル

鈴木正行

拙稿では、動詞「サケル」と「ヨケル」の意味の違いについて論じたい。

例えば体育の時間などであらぬ方向から友人に向かってボールがとんできたとすれば、「あぶない、よけろ！」

と、その友人に警告の言葉を叫ぶであろう。これを決して「さけろ！」とは言わないはずである。

また「芸術と実生活との相剋は避けがたい宿命であった。」という文で、形容詞「避けがたい」を「よけがたい」に置き換えることはできない。

このように使い分けられる理由はどこにあるのだろうか。今ここで漠然と感じるものを述べることは差し控えたいが、その〈言語直感〉は常に胸に抱きながら論をすすめたい。

論をすすめる手順として、まず「ことばの意味1」(平凡社選書47・柴田武編)に所載された長嶋善郎氏の論を紹介し、それを批判し、そして止揚する形で自己の論を述べたい。

1. 長嶋善郎氏の論

〈共通点〉

いずれも何らかの対象物との接触を回避することを表わす動詞であり、「…をサケル」「…をヨケル」という形で用いられる。

〈基本的相違点〉

①目に見える、形のある具体物(人間を含む)が対象である場合、サケル・ヨケルのいずれを用いることもできる。(以下傍点筆者)

例7 a 暗礁をサケル

b 暗礁をヨケル

8 a 自動車をサケル

b 自動車をヨケル

10 a 子どもをサケル

b 子どもをヨケル

①具体的な対象物であっても物理的な接触と具体的